

朧  
くふめは水也まよひ道

おぼろ

おぼろ

みず

なり

みち

門前もんぜんや  
何万石なんまんごくの  
遠とほがすみ



四国・愛媛



風早かざはや  
一茶のいっさのみち



俳人・小林一茶の  
足跡をたどる

月朧つきおぼろ  
よき門探りかどさぐ  
当あてたるぞ





**風早一茶のみちマップ**

..... 一茶の歩いた道  
 一茶のみちの道標

風早「一茶のみち」	
<b>のんびりコース</b> (7km・約2時間)	<b>お手軽コース</b> (5km・約1時間30分)
法橋運動広場(スタート) 約10分	法橋運動広場(スタート) 約10分
海岸沿い(石風呂川河口) 約20分	海岸沿い(石風呂川河口) 約20分
鎌大師堂 約30分	鎌大師堂 約15分
最明寺 約25分	大通寺 約25分
高土手 約15分	立岩川沿い(大師橋) 約15分
立岩川沿い(大師橋) 約15分	法橋運動広場(ゴール) 約15分
法橋運動広場(ゴール)	※滞在時間は含みません。

**風早「一茶のみち」**  
 スタート/ゴール  
 のんびりコース  
 お手軽コース

ようこそ!! 四国・愛媛・松山へ

# 風早一茶のみち

一茶の句とともにその足跡をたどりながら、  
 風早の歴史と自然に触れてみませんか。

〔目次〕

- 小林一茶 風早来遊…………… 3
- 伊予路の一茶 五十日の足跡…………… 5
- 風早一茶のみち…………… 7
- 一・風早の「二茶のみち」…………… 7
- 二・芭蕉塚(藤花塚)…………… 8
- 三・腰折の小燕子花はいちらしや  
いととき人のなさけにも似て…………… 9
- 四・龍〜ふめば水也まよひ道…………… 10
- 五・高橋五井邸跡…………… 11
- 六・門田兔文邸跡…………… 12
- 風早地方の三輪田米山の足跡…………… 13
- 風早のおすすめスポット…………… 14

本パンフレット発行にあたり、下記の関係機関・団体・個人様のご協力を頂きましたことを厚くお礼申し上げます。なお、誌面上の文字の配置・バランス等から、碑文や原文を適宜修正しています。

- ◆小林一茶 風早来遊  
風早一茶の会 門田協之介氏御文章を補記・改訂
- ◆伊予路の一茶 五十日の足跡(参考文献)  
・和田茂樹著『小林一茶寛政七年紀行』(愛媛出版協会)  
・長野県信濃町他関係自治体発行『一茶と歩く北信濃』
- ◆風早一茶のみち(参考文献)  
・松山市立子規記念博物館発行『俳句の里 松山(平成25年3月)』  
・門田圭三著『千寿の松の物語り(平成18年1月18日)』  
・門田圭三著『花の旅かさ・花なれやー一茶・兔文の歌仙発見ー(平成20年12月22日)』
- ◆題字揮毫 書家 高木 朝井



立岩川から鹿島を望む

寛政7年(一七九五)一茶は西国行脚の途中、四国に入る

小林一茶が初めて伊予路を訪れ、この風早の地(松山市北条(旧北条市))に足を踏み入れたのは、寛政7年(一七九五)正月13日(旧暦)で、彼33才のことでした。このときの紀行文が『西国紀行』として残っています。

一茶は今では歴史上にも名を残す有名な俳人ですが、当時は全く無名の俳諧師でした。

彼は信濃(長野県)の寒村の農家の長男として生まれましたが、15才のとき江戸に奉公に出され、貧しい中で俳諧を志し、二六庵竹阿に就いて猛烈な勉強をしましたが、竹阿が寛政2年(一七九〇)、死去すると間もなく30才から36才ころまで、九州や四国を中心に放浪・遍歴の旅を続けて修行に努めています。これが世に云う一茶の「漂泊時代」で、当地に来たのは、ちようどそのなかばのころでした。

一茶が伊予に来た目的は、その紀行文の最初に「有名な十六日桜(孝子桜)を見ようと、思いついてのこと」とあるように、実際の旅程もその開花日に合わせるような行動がとられ

歩いたことが伝わってきます。

「百歩ほどにして五井(高橋五井翁邸)を訪ね当て、やすやすと宿りて」

月朧よき門探り当たるぞ

(高橋邸建立の句碑)

このくだりは、落胆・苦悩していた一茶が、一転して五井邸の歓待に感激した様子が、文面に如実に溢れていて『西国紀行』中、秀逸・圧巻の項と云われています。

「十四日、十丁程(1km余り)八反地村兎文(風早郡大庄屋・門田与左衛門、俳号曉雨・曉堂とも)に泊まる。」

門前や何万石の遠がすみ

(門田邸建立の句碑)

「歌仙満巻して、十五日、松山二畳庵に至る。」

当時、上難波村高橋邸と八反地村門田邸との間には真直ぐに行ける路がありました。14日はおそらく、五井翁自らが案内役となり、兎文邸を訪れたものと思われまふ。その夜は風早の有力な俳人数名が集まり俳諧の座が設けられました。

この時の発句は、遠来の客人一茶で、これが前掲の「門前や……」の句で、



大通寺近くの山道

鎌大師堂

腰折山・恵良山(石風呂川沿いから鎌大師堂)

ています。しかしながら、この旅の本来の目的は、師の竹阿の死去後、恩師の親友であった茶来(最明寺の庵主)を訪ね、恩師亡きあとの二六庵の継承と現下の窮状について、心の内を打ち明け、教示を得たいとの思いを持つての来訪ではなかったかと思われまふ。

『西国紀行』により「正月十三日、樋口村(波方町)などいへるところを過ぎて七里となん、風早難波村、茶来を尋ね訪ひ待りけるに、已に十五年迹に死にきとや。後住西明寺に宿り乞に不許(後任の住職に一夜の宿を懇願したが許してもらえない)」「前路三百里(はるばる江戸から300里)只、かれ(茶来)をちからに來つるなれば、たよるべきよすがもなく、野もせ庭もせをたどりて(野原や庭やら判らぬままに歩き廻つて)…」

朧くふめば水也まよひ道

(最明寺建立の句碑)

句意からは、折からの十三夜もくもりがちのなか、雨上がりの水たまりに足をとられ、行方も知らず迷っていました。

ところが、200年以上の歳月を経て、平成12年(二〇〇〇)3月、若き天才俳諧師・一茶と風早俳壇の泰斗・兎文が巻いた歌仙が、一茶の生誕地近くの信州湯田中温泉(長野県下高井郡山ノ内町)の旅館「湯田中湯本」別棟湯薫亭で、発見されたのです。この時、発見された一茶の手帳『日々草(百十一巻)』の中の、掲載連句二十巻のうち第九巻目に「門前やの巻」を見ることが出来ます。

拙誌を手に取っていただいた皆様、一茶来遊の足跡を今に遺す「風早一茶のみち」をご散策いただき、往時をしのぶ長閑な農村のたたずまいや、恵良山・腰折山の雄大な自然を間近に感じながら、思は遙か開府1700年(風早初代国造・物部阿佐利入封以来)を数える古代ロマン風早の地に、思いをはせて頂ければ、幸いです。



最明寺より高縄山を望む

最明寺の一茶座像レリーフ

最明寺



# 小林一茶の生い立ち

西暦(年号)	年齢	できごと(「」は著書)
1763(宝暦13年)	1	5月5日、長野県信濃町柏原の農家に生まれる。本名弥太郎
1765(明和2年)	3	母にが亡くなる。
1770(明和7年)	8	父弥五兵衛が、はつと再婚。(継母と折合い悪し)
1772(安永元年)	10	弟仙六(のち弥兵衛)が生まれる。
1776(安永5年)	14	祖母かなが亡くなる。この頃、風早西明寺火災。
1777(安永6年)	15	春、江戸に奉公に出る。
1781(天明元年)	18	6月14日、西明寺住職茶来没(享年47才)。
1787(天明7年)	25	この頃、葛飾派(芭蕉の親友山口素堂を祖)三世溝口素丸の執筆(内弟子)になる。また、葛飾派二六庵竹阿・今日庵元夢にも師事する。
1791(寛政3年)	29	4月、14年ぶりに帰郷する。「寛政三年紀行」
1792(寛政4年)	30	3月、西国行脚に出発。寛政10年まで京阪、四国、中国、九州などを俳諧行脚。樗堂、關更など多くの有力な俳諧師と知己になる。「寛政句帖」
1795(寛政7年)	33	伊予路を訪れる。「西国紀行(寛政七年紀行)」 「旅拾遺(たびしうゐ)」 この後、寛政8~9年にかけて再び風早・松山を訪れる。
1798(寛政10年)	36	江戸に帰って二六庵を継ぐが、一門を築けず、知人の庇護を受けたり、房総をめくり、巡回俳諧師として暮らすようになる。「さらば笠」
1801(享和元年)	39	3月帰郷、看病の末、5月父が亡くなる。遺産分与をめくり、弟と対立。この後、何度も交渉が行われる。「父の終焉日記」
1803(享和3年)	41	江戸本所の愛宕社に住み、しばしば房総方面へ行脚。「享和句帖」
1804(文化元年)	42	成美らの句会に出るようになる。文化元年から5年まで「文化句帖」を書く。「文化句帖」
1807(文化4年)	45	父の7回忌に帰郷、故郷に門人が増え始める。
1808(文化5年)	46	父の遺産を折半する契約を弟ととりかわす。村松春甫など長野市長沼との交遊がはじまる。
1809(文化6年)	47	小布施町六川や高山村久保田春耕を訪ねる。
1810(文化7年)	48	「七番日記」を書き始める。「七番日記」
1811(文化8年)	49	「俳人番付」で最上段の前頭5枚目となる。「我春集」
1812(文化9年)	50	11月、故郷永住を決意して帰郷する。「株番」
1813(文化10年)	51	遺産交渉が和解、故郷柏原に定住が決まる。湯田中の湯本希杖を訪ねる。「志多良」
1814(文化11年)	52	きくと結婚。江戸俳壇引退記念集「三韓人」を刊行する。「三韓人」 8月21日、栗田樗堂没(享年66才)。広島県呉市豊町御手洗満舟寺に墓あり。
1816(文化13年)	54	長男千太郎が生まれるが、1ヶ月で亡くなる。
1818(文政元年)	56	長女さとが生まれる。
1819(文政2年)	57	6月、さとが亡くなる。1年のできごとを「おらが春」にまとめる。「八番日記」「おらが春」
1821(文政4年)	59	正月次男石太郎が亡くなる。
1822(文政5年)	60	「文政句帖」を書き始める。中野の山岸梅塵・飯綱町荒川草水らと交遊が始まる。「文政句帖」
1823(文政6年)	61	5月、妻きくが37才で亡くなる。12月、三男金三郎も亡くなる。
1824(文政7年)	62	飯山藩士の娘と結婚するが、まもなく離婚。
1826(文政9年)	64	3人目の妻やをと結婚。
1827(文政10年)	65	柏原の大火で母屋を焼失。焼け残りの土蔵で、11月19日亡くなる(新暦1828年1月5日)。
1828(文政11年)		没後、次女やたが生まれる。

## 一茶・瀬戸内 ロードマップ



## 西国紀行

# 伊予路の一茶 五十日の足跡

冬の月いよいよ伊予の高根哉<sup>18</sup>

これは伊予国への旅を企図した決意の句です。来遊中、一茶は多くの句を詠み、風早では三つの句を残しています。愛媛県にある一茶関連句碑は20余か所あります。

1月8日  
新暦2月26日

香川県観音寺市にある専念寺(竹阿の門弟五梅が住職)を発つ。土居島屋に泊。  
しづけしや春を三島のほかけ舟(四国中央市中曾根町・三島公園) <sup>1</sup>  
入野(四国中央市土居町)の暁雨館に山中時風(庄屋)を訪ねる。  
梅が香をはるばる尋ね入野哉(暁雨館跡) <sup>2</sup>  
行戻り尋ね入野の花見哉(四国中央市土居町入野・土居神社) <sup>3</sup>

### 再訪

- 2月1日 道後温泉
- 5日 松山城下発、三津浜に迂回、松田方十郎(方十亭)に6日間滞在。
- 9日 小深里(港山)の洗心庵で句会。  
汲みて知るぬるみに昔なつかしや  
旧懐の俳諧して 浦辺を逍遙して  
にな蟹と成て女嫌れな  
山やく山火と成りて日の暮るる哉  
梅の月一枚のこす雨戸哉(句碑が旧川之江市川滝・椿堂) <sup>21</sup>
- 11日 八反地村、兔文郎泊。(帰路)
- 14日 波止浜花雀亭泊。
- 15日 菓月庵を訪ねる。
- 19日 中村(旧東予市三芳)泊。  
庄内村(旧東予市) 実報寺桜見物。  
遠山と見しは是也花一木(旧東予市実報寺) <sup>11</sup>  
前神寺  
御百度や花より出て花に入る(西条市前神寺) <sup>12</sup>
- 20日 大町(西条市)はたごやに泊。
- 21日 逗留。  
起きて見れば春雨はれず日も暮れず  
桃の明サ切男眠気也(この2句外 西条神社) <sup>13</sup>  
都英子と伊曾乃神社に参詣。  
拜上頭に花の雫かな(西条市伊曾乃神社) <sup>14</sup>  
藤田橋平の誘いで、新居浜市沢津、阿弥陀堂泊。  
田ノ上の庄屋、小野周胤の影香舎に泊。  
長閑さや雨後の繩はり庭雀(新居浜市沢津二丁目阿弥陀堂) <sup>15</sup>  
暁雨館を再度訪ねる。3日泊。
- 26日 住吉神社(土居神社)に詣で、医王寺に泰山和尚を訪ねる。  
楽書の一句拙し山ざくら(土居神社) <sup>16</sup>
- 27日 泰山和尚と土居乙春亭を訪ねる。  
雨かすむ貴地のあの山めづらしや(四国中央市土居町之春亭跡) <sup>17</sup>  
冥加あれや日本の花惣鎮守(旧伊予三島市・三島神社) <sup>18</sup>  
菜の花や上り下り乃十八丁(四国中央市上柏町・山上集会所) <sup>19</sup>  
是でこそ登りかひあり山桜(四国中央市・三角寺) <sup>20</sup>



10 道後公園北入口の句碑

### 風早初来遊

- 10日 新浜(新居浜市) 豪商高橋家騎龍亭に泊。  
帳閉る加勢もせず旅寝とは(新居浜市滝の宮町真光寺・高橋騎龍墓) <sup>4-1</sup>
- (新居浜市西の土居町・観音堂南弁財天宮) <sup>4-2</sup>
- 11日 中村(現西条市三芳)泊。
- 12日 今治、卯七(河上桃泉亭)不在。波止浜、花雀亭泊。
- 13日 風早難波西明寺(現最明寺)を訪ねる。  
住職の文淇禪師(俳号は月下庵茶来)は既に逝去(享年47才)五井郎泊。  
臙々ふれば水也まよひ道(最明寺・難波校区) <sup>5</sup>  
月臙よき門探り当たるぞ(高橋邸・難波校区) <sup>6</sup>
- 14日 八反地村、兔文郎泊。(往路)  
門前や何万石の遠がすみ(門田邸・正岡校区) <sup>7</sup>
- 15日 松山、樗堂三置庵に到る。
- 16日 山越・龍穩寺山内の「十六日桜」見物。魚文郎に正風三尊幅を見る。  
又たくひ世は梅さかり此の桜(御幸丁目龍穩寺) <sup>8</sup> ※「花見の記」より  
正風の三尊見たり梅の宿(勝山町・分離帯) <sup>9</sup>

\*師の竹阿から教えられた、狩野探雪の絵に素堂・芭蕉・其角が賛えつけた「俳諧三尊画賛」のこと。

# 風早の「一茶のみち」

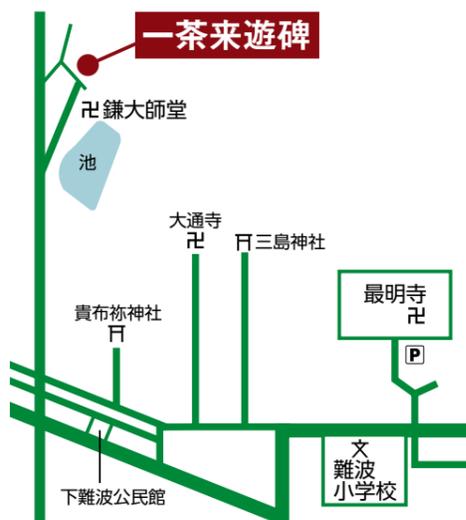


今から半世紀前の昔、昭和39年（一九六四）、小林一茶風早来遊170周年を記念して真蹟（実際に書いた筆跡・真筆）による一茶の句碑3基が建立された。風早の「一茶のみち」は、一茶と同じ道を歩いて足跡を訪ねる、句碑巡りの散策道として整備されたものである。

寛政7年（一七九五）、一茶は栗田樗堂（酒造業を営み、町方大年寄も務めた。一茶より14歳年上）を訪ね、両吟歌仙『水流れ（柳）』の巻など三巻を巻いた。また目的の十六日桜を見るため初めて松山藩領を歩いた。旧暦の1月13日に風早郡上難波村の西明寺（現在の最明寺）を訪ね、高橋五井邸に泊まり、その翌日は正岡郷八反地村の門田兎文邸に泊まっている。なお、1月15日に松山に向かい、樗堂の二畳庵に到着している。

風早の「一茶のみち」は、13・14日の2日間に歩んだ風早の地を紹介するもので、峠である「鴻ノ坂」を起点に、芭蕉塚のある「鎌大師堂」、また句碑が整備された「最明寺」、「高橋五井邸跡」、「門田兎文邸跡」まで約4.5kmの道程で、案内看板等が整備されており、自然と文学を楽しめる適度な散策コースとなっている。

松山市下難波（鎌大師堂前）MAP:C-2  
JR伊予北条駅から車・タクシーで約5分（約2km）  
北条公園（法橋運動広場）から徒歩30分（約1.7km）



# 芭蕉塚（藤花塚）



鎌大師堂の芭蕉塚は、元は「大師松」と呼ばれる巨松の根方にあつた。この松が枯死したため移され、現在は吉井勇の歌碑の右側に並んで建っている。

石碑には「芭蕉翁」とだけ刻印されているが、元禄元年（一六八八）4月、芭蕉が『笈の小文』で行脚の疲れを吐露した文を前書きとして詠んだ句「草臥れて宿かるころや藤の花」に因んだ筆跡を埋めた塚ではないかとされており、「藤花塚」とも呼ばれる。

月13日、一茶がこの鎌大師堂辺りにたどり着いたのは早春の夕刻頃だったと思われる。来た時にはこれを見る暇もなく俳友が住まう西明寺へと急いだと考えられるが、帰途にあるいは見たかもしれない。「句碑」・「歌碑」のはじまりは、自筆句歌の短冊、懐紙などを埋めて、その上に供養塔として塚を建てたものであつた。後に、句・歌だけを刻印した石碑を建てるようになった。

松山市下難波（鎌大師堂）MAP:C-2  
JR伊予北条駅から車・タクシーで約5分（約2km）  
北条公園（法橋運動広場）から徒歩30分（約1.7km）

「寛政五癸丑年秋中元日 藤花塚築之 松山 白菟 二葉 扇裕 風早 兎文 壺茗 圃夕 杜由 可興 梅長 恕由」とあり、一茶に宿を与えた「兎文」の名も見られる。



こしおれ 小かきつばた  
腰折の小燕子花は  
いちらしや

いとしき人の  
なさけにも似て

(吉井)勇



この歌碑のある鎌大師堂の北に、腰折山という特異な形をした山がある。

伝説によると、この山と鹿島山とが相撲を取り、鹿島山が沖合に投げ込まれて今の鹿島となった。相撲に負けた鹿島は、腹立ちまぎれに大きな岩を投げ付けた。それが腰折山の中腹に当たって、腰が曲がったような格好になったそうである。

また、この腰折山は、伊予節にも歌われる「コカキツバタ」が、春先に薄紫の花を咲かせることでも有名である。正式名称は「エヒメアマメ」。国の天然記念物に指定されており、「タレユエソウ」という別名もある。麓のエヒメアマメ保存会によって保護され、今もやさしい姿を保っている。

この歌は、そのほっそりとしたコカキツバタの姿に、思う人をだぶらせて詠んだもの。

おぼろ おぼろ  
朧くふめば水也  
まよひ道

小林一茶



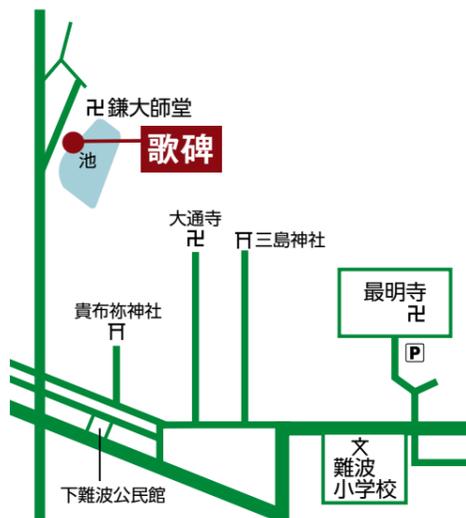
一茶の師二六庵竹阿の著した『其日ぐさ』を頼りに、西明寺(現最明寺)に辿りついた一茶であったが、竹阿の俳友で、西明寺11代住職竹苑文淇上人(月下庵茶来)に面会を求めたところ、15年前(天明元年)に亡くなっていた。(47才)

一茶は、『300里の道を茶来に会いたい一念でこまで来たのに』と大いに落胆、その上、一夜の宿を求めたが、うさんくさい風体を疑われたのか、住職がおらぬからと断られた。実はこの仕打ちにはほかならぬ背景があった。茶来が亡くなる5年前、安永5年(一七七六)に西明寺は火災で焼けており、更に茶来の没後は、住職が何人も交替するなど護持運営に混乱を極めていた。一茶来訪時はようやく上難波村や檀家の支援により再建が緒に就いた頃であった。由緒ある古刹を焼失し、再建の槌音

吉井勇は、高知県に草庵を設け、また伯方島にも長期滞在していたことから、伊予の地も度々訪れている。

鹿島を訪れた際には、「岩ありて天つ日ありて海ありて伊豫の二見はかしこかりけり」と詠じ、現在歌碑が鹿島に建つ。

なお、先の碑のある鎌大師堂は、歩き遍路の道で北条から浅海への峠の上り口にある。かつては「大師松」という巨松があったが、それも平成6年に枯死してしまった。



枝おれて  
何と這ふべき  
鳶かづら

(月下庵)茶来

という句碑が、「供養塔」ともに本堂横に立っている。

が聞こえ始めた頃とはいえず、檀家の手前とても遊行する俳諧師を泊めることはできかねたのが真相であろう。かくして一茶は、西明寺を出てとほとほと歩き始めた。最明寺境内には揚出句のほか、茶来の



## 高橋五井邸跡 ごせい



やがて、西明寺を出た一茶は、すぐ近くにある上難波村の庄屋、柳々庵五井邸にたどり着き、泊まることができた。五井は本名高橋伝左衛門といい、俳句を嗜む風流人で、人情に厚い人物であったことから、快諾したものであろう。天保5年（一八三四）に没している。ちなみに五井という俳号は、屋敷内に井戸を掘り五つ目にやとと良水に恵まれたからといわれる。さて、一転して宿を得た一茶は、「百歩ほどにして五井を尋ね当てやすやすと宿りて」と前書きして

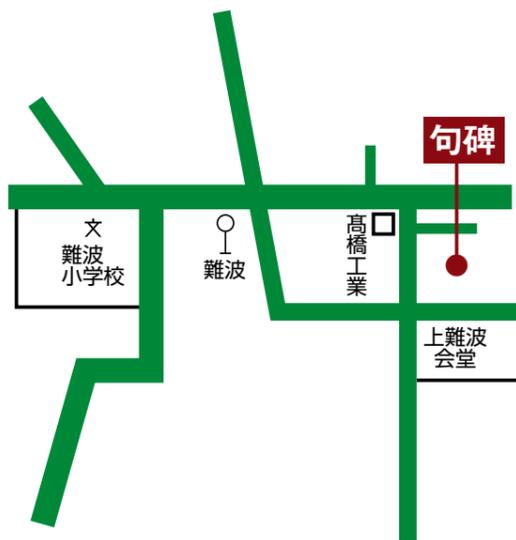
**月朧** つきおぼろ  
**よき門探り** よしもんたんぷり  
**当たるぞ** あたると

と、その心情を詠んでいる。「百歩ほど」とあるが、「最明寺」からこの「高橋五井邸跡」まで400m位は離れ

ている。

なお、五井邸跡の庭先にこの句を刻んだ句碑が建立されているが、今は人が住んでおらず、句碑を見ることはできない。

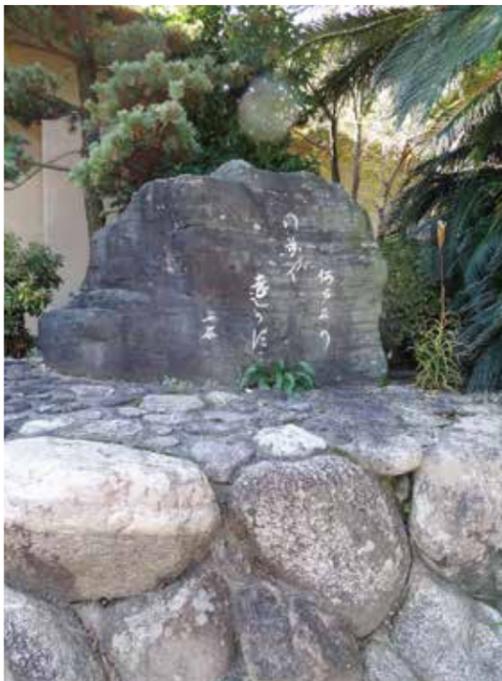
「最明寺」には、一茶の風早来訪200年を記念して作られた「一茶座像レリーフ」があり、その基壇に、「雀の子そこのけく御馬が通る」「やれ打つな蠅が手をすり足をする」「瘦がへるまけるな一茶是にあり」の3句が刻まれている。



松山市上難波 **MAP:D-3**

JR伊予北条駅から車・タクシーで約7分(約3km)  
北条公園(法橋運動広場)から徒歩70分(約4km)

## 門田兔文邸跡 とぶん



1月14日、五井邸を出た一茶は、1kmほど離れた八反地村(現松山市八反地)の庄屋、兔文、別号暁堂邸を訪ねて1泊し、歌仙を巻いて大いに楽しんだ。それが「茶懐中手帳の『日々草・百十一巻』」に納められていた(平成12年発見)。兔文は本名門田与左衛門といい、文化6年(一八〇九)に没している。

**門前や** もんぜんや  
**何万石の** なんまんこく  
**遠がすみ** とほ

(小林)一茶

「歌仙を巻く」とは、句会の参加者が次々と句を詠んでいき36句で区切りをつけるもので、座に招かれた一茶が発句を詠んだのである。「門前」とは門田邸西隣りにあった宗昌寺跡(榎玉社に連なる丘に移転)から望む広大な

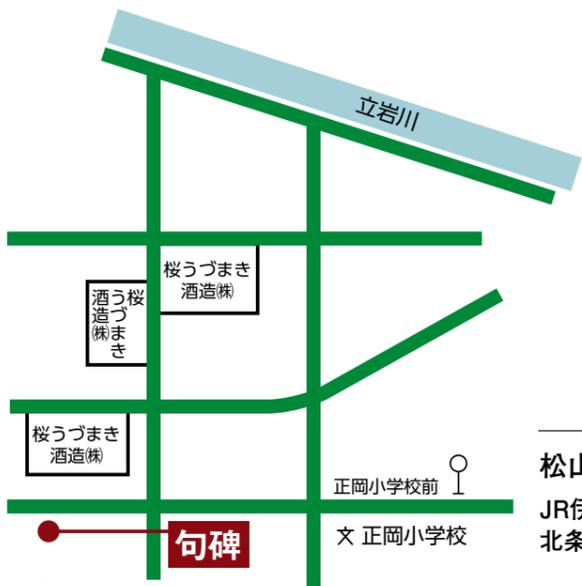
風早平野と、その視野の中に入る数戸の門前集落の添景といわれる。

翌15日、兔文邸を出た一茶は、その日のうちに松山城下、栗田樗堂の二畳庵に到着している。

なお、松山からの帰路、2月11日に再度兔文邸を訪れている。この時は3泊もしており、とても居心地が良かったようである。

松山市八反地 **MAP:C-4**

JR伊予北条駅から車・タクシーで約4分(約1.5km)  
北条公園(法橋運動広場)から徒歩40分(約2.5km)



# 「一茶のみち」から足を延ばして行ってみよう！ 風早のおすすめスポット

松山市風早地方には自然や歴史文化を感じられるスポットがあります。  
心地よい潮風が歩みを誘ってくれるかも。

**かしま 鹿島** MAP:A-3・4



☎089-948-6555 (松山市観光・国際交流課)

**恋人の聖地  
サテライト  
「幸せの鐘」**



鹿島の展望台

**鹿島周遊船「愛の航路」**



周遊船予約ダイヤル ☎089-992-1375  
※前日までに要予約。

**たかなわさん 高縄山**



千手杉  
推定樹齢 500 年を超える高縄山の巨杉

**たかなわ 高縄寺**



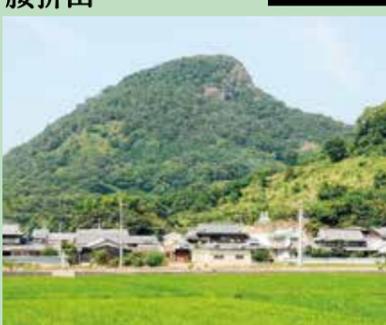
☎089-943-9242

**ぜんろう 善應寺**



☎089-992-0844

**こしおれやま 腰折山** MAP:C-1



**エヒメアヤメ (腰折山の可憐な花)**



国指定天然記念物 (大正14年10月8日)  
開花期: 陽春 4月上旬

**かまだい 鎌大師堂** MAP:C-2



☎089-992-0844

**道の駅風早の郷  
風和里** MAP:B-1



☎089-911-7700

**北条スポーツセンター  
(野球場)** MAP:B-1



☎089-993-1900

**しょうやく 庄薬師堂** MAP:D-4



☎089-992-3658 (十輪寺)  
※拝観には事前予約が必要。

※「風早(かざはや)」…古代から拓けた当地方(旧北条市・現松山市北条エリア)の呼び名。元風早郡。

## 風早地方の三輪田米山の足跡

豪快で奔放自在な書風から、近代書の先駆と評される三輪田米山。神職仲間や親交のあった氏子の依頼で、愛媛県中予一帯の神社や、旧家の石碑・扇・掛軸等に数多く揮毫しており、ここ風早の地にも米山の足跡は今もなお、息づいている。郷土色あふれる当地方にある五社を紹介しします。

### ①新田神社(松山市立岩米之野)

① 神名石 表:「新田神社」 裏:明治三十六年十二月



② 神号額 「新田神社 米山書」



③ 注連石(右) 「温故」



④ 注連石(左) 「知新」



⑤ 鳥居(右) 表:「修徳」  
裏:キクマ石工 田中勇太郎  
裏:明治三十六年十二月  
時 米山八十四



⑥ 鳥居(左) 表:「立義」  
裏:キクマ石工 田中勇太郎  
裏:明治三十六年十二月  
時 米山八十四



新田神社



### ②籠御前神社(松山市立岩米之野)

⑦ 注連石(右) 表:「大順」



⑧ 注連石(左) 表:「成徳」



裏:キクマ石工 田中勇太郎 裏:明治三十六年十二月 米山書

籠御前神社



### ③國津比古命神社(松山市八反地)

⑨ 記念石 表:「式内名神両社千年祭之碑」 裏:「明治三十年八月」



立岩川



### ④高縄神社(松山市宮内)

⑩ 寄附者名石 表:「金五拾円 文部兼外務大臣從二位勲号侯爵 大臣名等の小字は石文として大変珍しいものとされている。」



裏:「明治二十九年八月二十三日」

高縄神社



### ⑤正八幡神社(松山市小川)

⑪ 注連石(右) 「魚游於水」



⑫ 注連石(左) 「鳥遊於雲」



正八幡神社



